

このワークは、相手に対して質問が、うまくできない子どもを対象として製作しました。

質問ができない、という場合、その理由として主に考えられるのが、認識的な問題と、表現能力的な問題ではないかと思われます。

認識的な問題とは、“質問対象となる相手の発話内容や、問題解決の必要性が理解できていない”、“何を質問してよいかかわからない”、などの状況が考えられます。他者に対する共感や関心が薄く、“質問意欲に乏しい”といった場合も、これに含まれるかと思えます。

それに対し、表現能力的な問題とは、質問をことばで言い表すことができない場合です。質問のことば＝疑問文の表出が未熟な子どもは、質問したいことはあっても、それを相手に上手く伝達することができません。今回のワークは、第一に、この疑問文の表現能力を育てることを目的としています。

しかし、言語習得は基本的に、理解と表出の相補的な関係によって達成されます。疑問文もまた、その表現ができるようになるためには、相手からの質問が解る、すなわち疑問文の理解力を、同時に身につけて行かなければなりません。このワークも、疑問文作成を課題形式としていますが、“表出”だけでなく、“理解”を育てることも目的としています。ワークの取り組みを通して、疑問文、さらには「質問-応答」というコミュニケーションへの気づきと関心を、高めてもらうことができればと考えています。

## 【各課題の目的】

\* I「疑問詞選択課題」、II「助詞穴埋め課題」について

どちらの課題も、助詞への気づきを高めることが、一番の目的です。質問で使われている疑問詞の「いつ・どこ・だれ・なに」は、それぞれ、応答内容の「時・場所・人・モノ」に対応していますが、発達の未熟な子どもの多くは、その対応関係の洞察が困難です。その場合、まず、助詞の対応関係に注目させて解答を引き出します(例: 応答「学校で」→質問:「どこで」)。「が・で・に・を」などの格助詞の習得は、文中の単語の役割(主格、目的格など)の認識を基盤としており、その認識が、主格や目的格の内容を問う疑問詞の認識へと、つながって行きます。助詞が、疑問詞と疑問文習得の鍵になると考えています。

\* III「単語配列課題」、IV「疑問文作成課題」について

どちらの課題も、疑問詞疑問文の文法構造⇒疑問詞+助詞+動詞(+助動詞)+助詞 への気づきを高めることが目的です。ことばのテーブルで、よく体験するのは、子どもからの不完全な質問文です。(「行った、なに?」「だれですか、ごはん」etc.) しかしこれまで、言語指導における文法学習は平叙文中心で、疑問文の文法が取り上げられることは少なかったと思います。このワークを通して、疑問文を、豊富に、聞き・読み・書き・話してほしいと思います。

ワークの特徴

【待遇表現と疑問の助詞について】 ※待遇表現: 話し手が人間関係や場面などを配慮して用いる表現

\* このワークでは、丁寧体での会話と普通体での会話の問題が交互に配置されています。疑問を表す文末の助詞の使い分け(「～か?」と「～の?」)など、丁寧体・普通体それぞれの疑問文に触れることが目的ですが、待遇表現に対する気づきも意図しています。「質問」は、その内容や表現方法だけでなく、相手との関係性や場の状況の認識が重要です。待遇表現の習得は、子どもの社会性の指標であり、適切な質問を行うために不可欠なものと考えられます。

## 【プロソディについて】

\* 日本語の疑問文は、基本的に文末が尻上がり調になります。そのプロソディだけで疑問を表すこともできるので、非常に重要なのですが、文字では表現できません。今回のワークでは、文末の「?」記号で、尻上がり調を表そうとしています。問題解答後の読み合いの中で、プロソディに触れてもらえればと思います。

☆より詳しい資料として、葛西ことばのテーブルHP内の学習会資料(第16回「質問について考える」、および、第8回「語りについて考える」)を、ご参照いただければと思います。